

悲しみの泉

楠瀬 健昭

Spring and Fall: to a Young Child (1880)

Gerard Manley Hopkins

Margaret, are you grieving
Over Goldengrove unleaving?
Leaves, like the things of man, you
With your fresh thoughts care for, can you?
Ah! as the heart grows older
It will come to such sights colder
By and by, nor spare a sigh
Though worlds of wanwood leafmeal lie;
And yet you will weep and know why.
Now no matter, child, the name:
Sorrow's springs are the same.
Nor mouth had, no nor mind, expressed
What héart héard of, ghóst guéssed:
It is the blight man was born for,
It is Margaret you mourn for.

春と秋： 幼き子に

ジェラード・マンリー・ホプキンズ

マーガレット、おまえは心を痛めているのかい
黄金の木立が衣を脱ぎ捨てるのを見て。
木の葉のことを、人のことのように、おまえは
おまえの真新しい想像力で考えられるのかい。
ああ、心は星霜を経るにつれ
そのような光景に冷淡となり
ひとつまたひとつ葉を散らし、おびただしい数の青ざめた木々が広がっていても
やがて、溜息ひとつもらすことはない
それなのにおまえは嘆き悲しみ、しかも涙のわけを知っている。
さても、大丈夫だよ、幼き人よ、名目は何であれ
悲しみの泉はみな同じなのだから。

口に出して言ったことも、いや考えたこともなかった
心が耳にしたこと、魂が想像したことを、
あの葉枯れ病になるように人は生れついたのだよ、
マーガレットのことを、おまえは嘆き悲しんでいるのだよ。

(拙訳)

詩人はこの詩について、友人宛の書簡（1880年9月5日）の中で「事実に基づいたものではない」と述べている。だとすれば、これは詩人の心象風景である。詩人は、黄葉する森の中において落葉に涙する無垢な少女の姿に、悲しみの源泉は「死の呪い」にあり、人間の宿命を悲しんでいるのだと語りかける。だが、この不気味さ、残酷さをどう考えればいいのか。

詩人は「マーガレット」と彼女が置かれた「黄金の木立」とをどのように創造したのか。たとえば *The Pearl of Scotland* と呼ばれる、*St. Margaret Queen of Scotland* (c.1045-1093) から名前を取ったのかもしれない。スコットランド王妃は、わずか11歳で父を亡くし、後年、夫 *Malcolm III* と長男 *Edward* が *Battle of Alnwick* において1093年11月13日に戦死、悲しみのあまり数日後に亡くなっている。伝説上の人物ではあるが、十四救難聖人の一人、*St. Margaret of Antioch* (289-304)の方がマーガレット創造には影響があるのかもしれない。異教徒の娘に生まれたが、キリスト教徒となった彼女は、ドラゴンに姿を変えたサタンに呑み込まれたが脱出することができた。さらに火責め、水責めにも奇跡的に耐えたが、わずか15歳で斬首されたそうである。あるいは、1879年11月5日付けの書簡に言及のある、*Margaret Clitherow* (1556-1586) から名前を取ったのだろうか。ホプキンズは、エリザベス朝にあってカトリック教徒であった、彼女の悲惨な最期を詠った未完成詩‘*Margaret Clitheroe*’ (1877?) も残している。

Golden Grove は *Wales* の地名に見られるが、英国国教会の主教 *Jeremy Taylor* (1613-67) 作成の「日々の祈りと連祷のマニュアル」(1655) は *Golden Grove* というタイトルである。その中には「若者向きの問答書」*A Short Catechism for the Institution of Young Persons in the Christian Religion* があり、「最初の人であり罪人である、アダムは神の戒めを破り、自分自身と子孫に死と病と不幸と、さらに肉体と精神の不調をもたらし、わたしたちは樂園を追放され、不老不死を失った」などの記述がある。もちろんイエス・キリストによる救済にも言及がある。これらにヒントを得て、ホプキンズは単なる地名ではなく抽象度を高め、*Goldengrove*、「黄金の木立」を創造しているのではないか。「天は喜び、地は楽しみ、海とその中に満ちるものとは鳴りどよめき、田畑とその中のすべての物は大いに喜ぶ。そのとき、林のもろもろの木も主のみ前に喜び歌うであろう」(「詩篇」96. 11-12) を想起させ、神が創造する世界の栄光を凝縮して表現しているように感じられる。

John Milton (1608-1674) も *Paradise Lost* (1664) の冒頭三行半によって、イーヴがサタンに唆され、神の言いつけにそむき禁断の木の実を食し、アダムもともに死すべき存在となり、エデンの園を追放されることを簡潔に語り始めるが、樂園喪失を語るだけではなくてイエスによる罪の贖いをも忘れない。

Of man's first disobedience, and the fruit
Of that forbidden tree, whose mortal taste
Brought death into the world, and all our woe,
With loss of Eden, till one greater man
Restore us, and retain the blissful seat,
Sing heavenly Muse, ...

神に対する人間の最初の叛逆と、またあの禁断の木の実について、人間がこれを食べたためにこの世に死とわれわれのあらゆる苦悩がもたらされ、エデンの園が失われ、そしてやがて一人の大いなる人が現われ、われわれを贖い、美しい住処を回復し給うのだが、おお、天にいます詩神よ、願わくばこれらのことについて歌い給わらんことを！

(平井正穂訳)

ところが、ホプキンは「春と秋」の中では、イエス・キリストによる贖いについては語っていないだけに、マーガレットの悲しみには救いがないように思われる。わたしたちはあわれむべき存在となる。この詩は「人は死すべき定めであり、人は原罪をアダムとイーヴから受け継いでいるのだ」ということを歌っている。しかし、この詩を聴くものは、「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである」(「コリント人への第一の手紙」15. 22)ということも知っている。そう考えれば希望はある。しかし、この圧倒的な悲しみは忘れることができない。

いろいろ考えては見たが、どうやら「春と秋」は Peter Milward⁽¹⁾がさりげなく示唆するように、次に引用する中英語詩 'Lollai'⁽²⁾を踏まえているようである。この子守り歌のこどもは生まれながらに原罪を背負わされた赤ん坊である。

Lollai, l[ollai], litil child, whi wepistou so sore?
Nedis mostou wepe, hit was izarkid þe zore
Euer to lib in sorow, and sich and mourne euer[more],
As þin eldren did er þis whil hi aliues w[o]re.

Lollai, [lollai], litil child, child lolai, lullow,
Into vncuþ world incommen so ertow.

Bestis and þos foules, þe fisses in þe flode,
And euch schef aliues imakid of bone and blode,
Whan hi commiþ to þe world hi doþ hamsilf sum gode,
Al bot þe wrech brol þat is of Adamis blode.
Lollai, l[ollai], litil child, to kar ertou bemette,
Pou nost nozt þis worldis wild bifor þe is isette.

Child, if betidith þat þou ssalt þriue and þe,
Þenþ þou were ifostred vp þi moder kne,
Euer hab mund in þi hert of þos þinges þre:
Whan þou commist, wha[t] þou art and what ssal com of þe.
Lollai, l[ollai], litil child, child lolai, lolai,
Wiþ sorow þou com into þis world, wiþ sorow ssalt wend awai.

Ne tristou to þis world, hit is þi ful vo,
Þe rich he makip pouer, þe pore rich also;
Hit turneþ wo to wel and ek wel to wo;
Ne trist no man to þis world, whil hit turniþ so.
Lollai, lolai, litil child, þi fote is in þe whele;
Pou nost whoder turne, to wo oþer wele.

Child, þou ert a pilgrim in wikidnis ibor[n],
Pou wandrest in þis fals world, þou lok þe bifor[n]!
Deþ ssal com wiþ a blast vte of a well dim hor[n],
Adamis kin dun to cast, hamsilf haþ ido befor[n].
Lollai, l[ollai], litil child, so wo þe wor[þ] Adam
In þe lond of paradis, þroz wikidnes of Satan.

Child, þou nert a pilgrim, bot an vncuþe g[e]st,
Þi dawes beþ itold, þi iurneis beþ i[ke]st;
Whoder þou salt wend, norþ oþer est,
Deþ þe sal betide, wiþ bitter bale in brest.
Lollai, l[ollai], litil child, þis wo Adam þe wrozt,
Whan he of þe appil ete and Eue hit him betacht.

ローレイ、ローレイ、おさなごよ、そんなに激しくなぜ泣くの
おまえが泣くのも無理はない、おまえは悲しみにあけくれ、
ためいきをつき、いつも嘆き悲しむように、はるか昔になっていた
おまえのとしおさ人が生きているとき、そうだったように
ローレイ、ローレイ、おさなごよ、子よ、ローレイ、ルラウ
そうして見知らぬ世界へとおまえはやってきた

動物とあの鳥、大水の中の魚

そして骨と血とからなる、生けとし生けるもの
この世に生まれたのは、それらにとって良いこと
アダムの血をひく、あわれなもの他すべてにとって
ローレイ、ローレイ、おさなごよ、おまえには苦勞の種が割り当てられている
おまえは目の前にすえられた、この世の荒廢を知らない

子よ、もしも生きながらえることになれば、
母のひざのうえで育てられたことを思え
こころに次の三つのことを覚えておけ
どこから来たのか、どこにいるのか、どうなるのか
ローレイ、ローレイ、ローレイ、おさなごよ、ローレイ、ローレイ
おまえは悲しみ抱きこの世に生まれ、悲しみ抱きこの世を去る

けっしてこの世を信じてはならない、おまえの完璧な敵なのだから
この世は富めるものを貧しく、貧しきものを富めるようにする
この世は悲しみを喜びに、喜びを悲しみに変える
そうしている間は、だれにもこの世を信じさせてはならない
ローレイ、ローレイ、おさなごよ、おまえの足は運命の紡ぎ車の中に
悲しみとなるか、喜びとなるかは、わからない

おさなごよ、おまえは邪惡に生まれたさすらい人

おまえはこの裏切りの世をさすらう

目の前にあるものを見よ、死神はかすかに聞こえる遠くの角笛からの一吹きで
やってくるものだ、アダムの一族郎党を打ちのめすために以前にそうしたように
ローレイ、ローレイ、おさなごよ、この悲しみはアダムがおまえのために作りしもの
樂園でサタンの邪惡を通じて

おさなごよ、おまえはさすらい人ではなく、見知らぬ客人

おまえの旅路の果ては知られている
北へ行こうと東へ行こうと、死はおまえの身に襲いかかる
胸に激しい悪意を抱いて
ローレイ、ローレイ、おさなごよ、この悲しみをアダムはおまえのために作った
アダムがリンゴを口にしたとき、そのリンゴはイーヴがアダムに渡したもの
(拙訳)

この他にも中英語で書かれた、この種の子守り歌は現存するが、それらの詩の中では、子守り歌を聞くのは人間のこどもではなく、神の子イエスであり、語りかけるのはマリアであるとのことである。⁽³⁾ 現在でも、‘Christ Child’s Lullaby’の伝統は引き継がれている。一例として William Chatterton Dix 作詞 ‘What Child is This’ (1865) を引用する。⁽⁴⁾

What Child Is This?

What Child is this who, laid to rest
On Mary's lap is sleeping?
Whom Angels greet with anthems sweet,
While shepherds watch are keeping?

This, this is Christ the King,
Whom shepherds guard and Angels sing;
Haste, haste, to bring Him laud,
The Babe, the Son of Mary.

Why lies He in such mean estate,
Where ox and ass are feeding?
Good Christians, fear, for sinners here
The silent Word is pleading.

Nails, spear shall pierce Him through,
The cross be borne for me, for you.
Hail, hail the Word made flesh,
The Babe, the Son of Mary.

So bring Him incense, gold and myrrh,
Come peasant, king to own Him;

The King of kings salvation brings,
Let loving hearts enthrone Him.

Raise, raise a song on high,
The Virgin sings her lullaby.
Joy, joy for Christ is born,
The Babe, the Son of Mary.

マリアの膝に寝かされて眠る
この子はどんな子
羊飼いらが見守る中
天使らが甘美な聖歌で迎える子は

この方は、この方は、王キリスト
羊飼いらが守り、天使らが歌う
さあ、さあ、急ぎキリストに賛美の歌を
幼子、マリアの息子に

なぜキリストはかくもみすぼらしい地所に眠るのか
雄牛やロバが餌をたべる飼葉桶に
良きキリスト者たちよ、恐れよ、声なき御言葉は
ここにいる罪人らのためにとりなしておられる

釘が、槍がキリストを刺し貫くことになる
われのために、なんじらのために十字架を背負い
万歳、万歳、言葉は肉となれり
幼子、マリアの息子よ

ゆえにキリストに乳香を持て、黄金と没薬を
さあ農民よ、キリストを王と認めよ
王の中の王が救いをもたらす
愛の心をもってキリストを王座につけよ

歌を高さところに掲げよ
聖母マリアは子守り歌を歌う
喜びを、キリストが生まれた喜びを
幼子、マリアの息子が

(拙訳)

「春と秋」の中では言及されていない部分が、ここには語られている。すなわちミルトンにことばを借りれば、「そしてやがて一人の大いなる人が現われ、われわれを贖い、美しい住処を回復し給うのだが」ということである。‘Christ Child’s Lullaby’ の伝統へとつらなる文脈で読めば、「春と秋」の異様な不気味さも理解できる。「春と秋」は詩人ホプキンズによる、いっふう変わった子守り歌である。それと同時に司祭ホプキンズによる説教でもある。

『聖書』からの引用は、日本聖書協会（1976）による。

—注—

(1) Peter Milward, *Landscape and Inscape: Vision and inspiration in Hopkins's Poetry* (Eerdmans, 1975), p.74.

(2) Thorlac Turville-Peter, ed. *Poems from BL MS Harley 913 'The Kildare Manuscript'* (Oxford U. P., 2015), pp.57-58.

(3) 和田葉子, 「ロンドン大英図書館所蔵の写本 Harley 913 に収録された中英語詩 *Lollai* とそのラテン語版の関係についての一考察」、関西大学東西学術研究所『関西大学東西学術研究所紀要』第 48 輯 (2015) pp.127-136 所収、p.131.

(4)https://www.hymnsandcarolsofchristmas.com/Hymns_and_Carols/what_child_is_this_version_1.htm